The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語使用に関する対照社会言語学的研究 ： 日本人・韓国人・韓国人日本語学習者の否定表明を中心に
Author(s)	金, 慶燕
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42022
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 3 】

氏　　名	金（きん）　慶燕（きょんよん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　14911　号
学位授与年月日	平成11年7月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科　言語文化学専攻
学位論文名	**言語使用に関する対照社会言語学的研究 ー日本人・韓国人・韓国人日本語学習者の否定表明を中心にー**
論文審査委員	(主査) 教授　深澤　一幸 (副査) 教授　西口　光一　　助教授　山下　仁

論文内容の要旨

本研究の目的は、日本語と韓国語の言語使用において、否定的な意思表明を中心に言語表現の種類及び談話の構成からなる表現の機能と方略を比較対照し、それを踏まえて韓国人日本語学習者の日本語にみられる諸現象とそれらの要因を解明することであった。本論文は全6章からなっている（図1）。

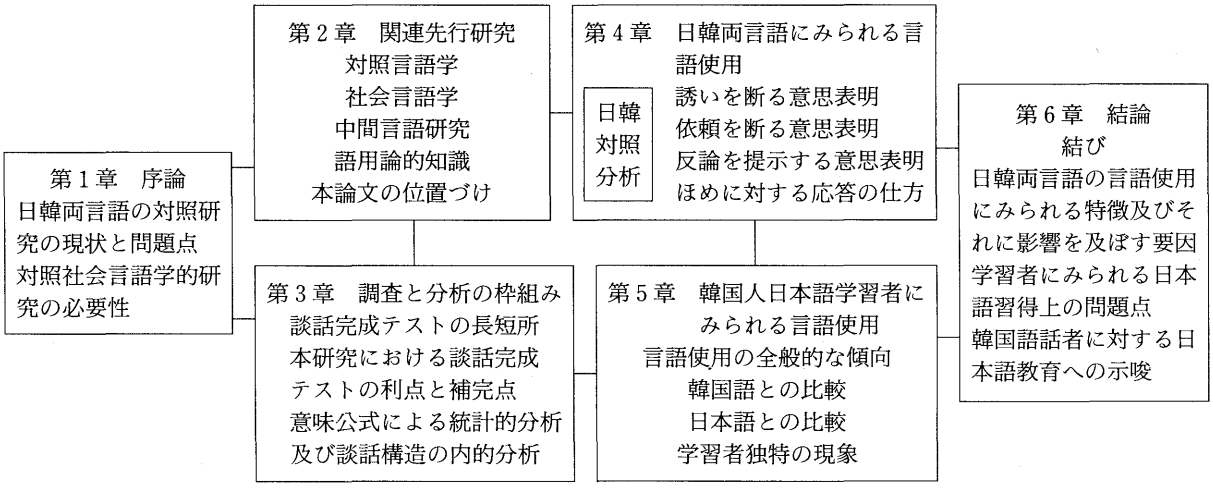

図1　本論文の構成

第1章においては、日韓両言語の対照社会言語学的な研究の現状と必要性について述べている。日韓コミュニケーションの特性に関して、間接表現・直接表現といった相対的な特徴は一般論として提示されている。しかしながら、これらには両言語間の表面的な比較対照に終始している論考が多い。そこで、具体的なコンテクストのなかで言語使用に潜在する言語社会規範の相違及び言語使用の特性はどのような要因に起因するかを探るためにデータを用いて検証することにした。

第2章では、対照研究と社会言語学的研究の特徴をもつ本研究の理論的な背景を確認し、これを論述した。本研究では、これまでの談話完成テストという研究方法を用いた先行研究で既に指摘されている短所を補完するために、発話の表面的な分析から、談話の内的構造と表現の意味内容まで観察することに重点をおくことにした。調査によって得られたデータを統計的に分析する量的な処理を行うことは客観的で正確である。さらに、質的分析を行えば、数量的分析には現れない側面が見えてくることもあると考えられる。このような調査と分析に関する詳細を第3章で論じた。

日本語、韓国語、韓国人日本語学習者の日本語という3種類のデータを基に二段階の分析を行った。第一段階として、第4章では日韓両言語によるデータから、全般的に多く使用されている言語表現及び各表現を取り巻く状況をめぐって比較対照の観点から分析を試みた。断り方、反論提示の仕方という否定的な意思表明の発話場面と、否定的な表明がしばしば現れると期待されるほめことばに対する応答が行われる発話場面ごとにデータの分析を行った。場面ごとに共通して現れた結果のなかで顕著な日韓両言語の対照的な特徴をとりあげてみる。断り方として日本語では謝罪表現、残念な気持の表現が多く使用されているのに対して、韓国語では断る理由の具体的な内容をもった表現が多く使用されていた。また、日本語では、謝罪を前に伴って後ろに断る理由を加えるというパターンの使用が多いが、韓国語では理由のみをあげた断り方が多くなっていた。反論提示の仕方にみられる日韓両言語の相違は、日本語では反対する立場を先に示すような態度表明の言語表現に伴って反対意見や主張を示す傾向がみられた。これに対して、韓国語では日本語のような態度を示す表現の使用は少なく、初めから反対意見を述べるか、または相手の意見を一旦受容することを示す表現を多く使っている傾向がみられた。ほめに対する応答の仕方では、日本語では、感謝か否定かという相反する表現を多く使用し、それによってほめられたことを受け容れるか否かという態度を示しているのに対して、韓国語では、日本語のような感謝や否定表現の使用は少なく、その代わりにほめられたことを軽減する表現を多く使用していた。

このような結果のなかで、日本語では間接表現とともに明示的な言語表現の使用傾向も韓国語より多いことが判った。これは、一般論として提示されている特性と相反する傾向である。ところが、それらの表現が談話の構成要素として組み合わされるときに、表現それぞれの機能と方略が日韓両言語で異なっていた。すなわち、日本語では、明示的な表現は談話の前に置くよりは、中や後ろに置いたり、明示的な表現を示す前に、否定的な表明を和らげる機能をもつ言語表現の使用が多いことが観察され、それが、一般的な日本語の言語使用規則であると推察された。それに対し、韓国語では、談話の構造は単純である。つまり、最初から伝達意思が明確に表明される言語表現を用い、場合によってその後ろに、態度に対する繕い直しの機能をもつ言語表現を示すという言語使用規則があると判断された。したがって、日本語と韓国語の言語使用にみられる特性は、意思表明のために多く使用される言語表現そのものの相違ではなく、一般的な言語使用規則が異なっていることに起因していることが明らかになった。

以上のような日韓両言語の比較をもとに、第二段階として、第5章では韓国人日本語学習者の日本語にみられる諸現象について検討した。全発話場面を通して学習者の日本語にみられた傾向は、各言語表現の使用においては日本語の傾向に向かっている。ところが、それらの表現が構成された談話の内的構造は日本語より韓国語の傾向に類似していた。こうした現象は、上述したような表面的な特性としての認識が強く働いた結果であることがうかがえる。日本語の適切な表現方法としての特性は認識されているが、実際に談話を構成するときは母語の規範に基づいた方略をとっていると指摘される。つまり、コンテクストに適切な機能を果たすことのできる言語使用に関する語用論的知識が学習者に欠けていることがみられた現象であると言える。したがって、日本語と韓国語が言語構造として類似しているとは言え、言語使用の在り方は極めて多様かつ複雑であることを認識し、学習者の言語学習・習得に適用できる、社会言語的規範までを明らかにしなければならないことが示唆された。

第6章では、以上、日韓両言語の言語使用に関する特性は多用される言語表現の相違というより、様々な言語表現が談話のなかで構成され、またどのような機能と方略をとらえているかという相違に起因していると論じられた。そして、学習者の日本語ではこのような日本語に適切な談話の構成ができておらず、学習の際は、社会言語的規範とともに言語使用規則に関する知識に留意する必要があると結論される。

対人関係の調和を重視するとされる日本文化において招待、依頼、疑問や叙述に対して否定的な意思表明を行うことの悪影響にもかかわらず、一般に外国語としての日本語の教科書は否定的な表明を問題化することなくごく単純に取り扱っている。一般に言われる「日本人は否定を避ける傾向がある」という通俗的考察に反して、談話ではよりフォーマルなコンテクストにおいても否定的表明がなされるということが明らかになった。また、一定の日本語能力を持つと認定できる韓国人日本語学習者でも必ずしも日本語の否定的な意思表明を適切に行うことができないという実態が明らかになった。否定的な意思表明のような通常単純だと思われがちな言語使用についても、データに基づいた異なるコンテクストにおける研究の必要性が明らかになったと言えよう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語と韓国語の言語使用において、否定的な意思表明を中心に言語表現の種類及び談話の構成からなる表現の機能と方略を比較対照し、それを踏まえて韓国人日本語学習者の日本語にみられる諸現象とそれらの要因を解明することを目的とする。

論文の構成と内容

第1章においては、日韓両言語の対照社会言語学的な研究の現状と必要性について述べている。日韓コミュニケーションの特性に関して、間接表現・直接表現といった相対的な特徴は一般論として提示されている。しかしながら、これらには両言語間の表面的な比較対照に終始している論考が多い。そこで、具体的なコンテクストのなかで言語使用に潜在する社会言語的規範の相違および言語使用の特性はどのような要因に起因するかを探るためにデータを用いて検証している。

第2章では、対照研究と社会言語学的研究の特徴をもつ本研究の理論的な背景を確認し、これを論述している。本研究では、これまでの談話完成テストという研究方法を用いた先行研究で既に指摘されている短所を補完するために、発話の表面的な分析から、談話の内的構造と表現の意味内容まで観察することに重点を置いている。

第3章では、本研究で使用した調査と分析に関する詳細を論じている。調査によって得られたデータを統計的に分析する量的な処理を行うことは、客観的で正確であり、さらに、質的分析を行えば、数量的分析には現れない側面が見えてくることもあると述べ、量的・質的両様の分析の重要性を論じている。

第4章では、日本語、韓国語、韓国人日本語学習者の日本語という3種類のデータを基に二段階の分析を行なっている。第一段階として、日韓両言語によるデータから、全般的に多く使用されている言語表現及び各表現を取り巻く状況を巡って比較対照の観点から分析を試みている。断り方、反論提示の仕方という否定的な意志表明の発話場面と、否定的な表明がしばしば現れると期待される、褒めことばに対する応答が行なわれる発話場面ごとにデータの分析を行なっている。場面ごとに共通して現れた結果の中で顕著な日韓両言語の対照的な特徴を取り上げている。断り方として日本語では謝罪表現、残念な気持ちの表現が多く使用されているのに対して、韓国語では断る理由の具体的な内容を持った表現が多く使用されている。また、日本語では謝罪を前に伴って後ろに断る理由を加えるというパターンの使用が多いが、韓国語では理由のみを上げた断り方が多くなっている。反論提示の仕方にみられる日韓両言語の相違は、日本語では反対する立場を先に示すような態度表明の言語表現に伴って反対意見や主張を示す傾向が見られる。これに対して、韓国語では日本語のような態度を示す表現の使用は少なく、初めから反対意見を述べるか、または相手の意見を一旦受容することを示す表現を多く使っている傾向が見られる。褒めに対する応答の仕方では、日本語では、感謝か否定かという相反する表現を多く使用し、それによって褒められたことを受け入れるかいなかという態度を示しているのに対して、韓国語では、日本語のような感謝や否定表現の使用は少なく、その代わりに褒められたことを軽減する表現を多く使用している。

このような結果の中で、日本語では間接表現とともに明示的な言語表現の使用傾向も韓国語より多いことがわかった。これは、一般論として提示されている特性と相反する傾向である。ところが、それらの表現が談話の構成要素と

して組み合わされるときに、表現それぞれの機能と方略が日韓両言語で異なっている。すなわち、日本語では、明示的な表現は談話の前におくよりは、中や後ろにおいたり、明示的な表現を示す前に、否定的な表明を和らげる機能を持つ言語表現の使用が多いことが観察され、それが、一般的な日本語の言語使用規則であると推察される。それに対し、韓国語では、談話の構造は単純である。つまり、最初から伝達意思が明確に表明される言語表現を用い、場合によってその後ろに、態度に対する繕い直しの機能を持つ言語表現を示すという言語使用規則があると判断される。したがって、日本語と韓国語の言語使用に見られる特性は、意志表明のために多く使用される言語表現そのものの相違ではなく、一般的な言語使用規則が異なっていることに起因していることを明らかにしている。

第5章では、以上のような日韓両言語の比較を基に第二段階として、韓国人日本語学習者のデータを分析した。そこでは、日本語に見られる諸表現の使用においては日本語の傾向に向かっている。ところが、それらの表現が構成された談話の内部構造は日本語より韓国語の傾向に類似している。こうした現象は、上述したような場面的な特性としての認識が強く働いた結果であることがうかがえる。日本語の適切な表現方法としての特性は認識されているが、実際に談話を構成するときは母語の規範に基づいた方略を取っていると指摘できる。つまり、コンテクストに適切な機能を果たすことのできる言語使用に関する語用論的知識が学習者に欠けていることが見られた現象であるといえる。したがって、日本語と韓国語が言語構造として類似しているとはいえ、言語使用のあり方はきわめて多様かつ複雑であることを認識して、学習者の言語学習・習得に適用できる社会言語的規範までを明らかにしなければならないことが示唆されている。

第6章では、以上日韓両言語の言語使用に関する特性は、多用される言語表現の相違というより、さまざまな言語表現が談話の中で構成され、その構成に見られる機能と方略が異なっており、両言語の使用に関する特性はそうした相違に起因していると論じている。そして、学習者の日本語ではこのような日本語に適切な談話の構成ができておらず、学習の際は、社会言語的規範とともに言語使用規則に関する知識に留意する必要があると結論している。

対人関係の調和を重視するとされる日本文化において招待、依頼、疑問や叙述にたいして否定的な意思表明を行なうことの悪影響にもかかわらず、一般に外国語としての日本語の教科書は否定的な表明を問題化することなくごく単純に取り扱っている。一般に言われる「日本人は否定を避ける傾向がある」という通俗的考察に反して、談話ではよりフォーマルなコンテクストにおいても否定的表明がなされるということが明らかになっている。また、一定の日本語能力を持つと認定できる韓国人日本語学習者でも必ずしも日本語の否定的な意志表明を適切に行なうことができないという実態が明らかになっている。否定的な意志表明のような通常単純だと思われがちな言語使用についても、データに基づいた異なるコンテクストにおける研究の必要性が明らかになったと言えよう。

総評

以上のごとく、本研究は、調査方法としては従来のアンケート調査の方法を踏襲し、また日本人72名、韓国人62名、日本語学習者49名、総計183名と被験者は決して多くないものの、アンケート内容の設問が妥当であること、同質的な被験者が適切に抽出されていること、結果のデータ分析・記述方法が優れていることなどにより、出てきた結論は従来の研究では不明であったり、あいまいであった点をかなり明確にし、韓国語話者を対象とした日本語教育の改善のための貴重な資料を提供している。

また、社会言語学という大枠のなかで、調査結果を分析するのに、いわゆる意味公式にとどまらず、談話の構成方法や表現内容、さらにはモダリティ表現や特定の機能を担う慣用表現にまで分析を深めていったのは、大いに評価できる。

しかし、本研究には不足の点もある。たとえば、性別、親疎、上下などの社会文化的要因に関連した両言語の社会言語学的異同を議論するには、やはり証拠としてのデータ数が足りないこと、社会言語学が大きくからむ場面でポライトネスなどの理論に言及していないこと、第6章の結論ではもう少し関連する事項の観察を深めたうえで、結論をよりふくらませたほうがよかったと思われることなどである。もっとと、これらは今後の研究の進展により、容易に克服できると判断してよかろう。

ともあれ、最初に日本語と韓国語の場合というベースライン、データを分析した上で、韓国人日本語学習者の言語

行動を分析した本論文の着想は卓抜であり、学界に大きな貢献をしたといえよう。その日本語の文章がすぐれていることも、特筆すべきである。

以上の諸点から、本論文はこの分野の研究論文として高い水準に達している優れたものであり、博士(言語文化学)の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。